



【職場】長野県上水内郡小川村
【職業】飲食店店主

現在 長野県



赴任国 マラウイ共和国



【赴任地】ムジンバ県

【職種】エイズ対策

【派遣期間】2007年6月～2009年6月

マラウイと小川村、大豆が繋ぐ二つの故郷

中村雄弥さん だいず食堂パチョコ

Yuya Nakamura

マラウイでエイズ患者の栄養不良を目の当たりにしたことがきっかけで、
大豆の可能性に気付いたという中村雄弥さん。

現在、家族で定住することになった長野県上水内郡小川村で、大豆を扱う食堂を営んでいます。

特産品『西山大豆』の 魅力を再発信

中村さんが営む『だいず食堂パチョコ』は、道の駅おがわの一角にある。その名の通り、主力商品は大豆を使った加工食品だ。

遠く北アルプスを望む小川村は、粘土質で水はけの良い土地と寒暖差のある気候条件により、古くから西山大豆の名で知られる大豆の名産地だ。「豆腐でも味噌でも醤油でも、日本の食卓に欠かせない大豆なのに、都会の人はどう育てているか、どう加工されているかを知らない」と話すのは、JICA海外協力隊（以下、JOCV）経験者の中村さんだ。地域おこし協力隊としてやってきたこの場所で、大豆の可能性を追求し、その魅力を発信したいと、食堂をオープンした。

中村さんと大豆との出会いは、JOCVとして派遣されたマラウイで、栄養不良に苦しむエイズ患者向けの食材に大豆を取り入れたことに遡る。現地で目にしたのは、自給自足を中心とした地についた生活だった。それが、中村さんが小川村に抱いたイメージと重なった。「大豆の可能性は無限大。いろんな人に大豆の価値、新たな可能性を知ってもらいたい」現在、農産物の栽培方法や家庭の味を村の人々に教わりながら、大豆を素材にしたスムージーや焼き菓子など、斬新な発想で次々と新商品を開発している。

「ゆくゆくは食育講座などを通じて村内外への発信を強化していきたい」人口減少と高齢化により村の経済活動の先細りが危惧される中、村全体として新たな産業を見つけていくことがこれから

の課題だと中村さんは語る。そんな数少ない若手人材の中村さんを、移住当初から支えてきたのが吉田夫妻だ。自分たちの子どもも都会へ出ていったという二人は、「たしかに村には都会にはない温かい繋がりがあ。でも、それだけでは生活できない。若い人が夢を描ける場所を作ることが大切だ」と小川村の未来を案じる。だからこそ、家族で移住し共働きで子育てする中村さんたちを高く評価し、大きな期待を寄せてい





大豆を使った数々のメニューは特産品を求める観光客の好奇心を刺激している



移住当初から中村さんを応援する自給自足の暮らしの師匠、吉田千恵子さんと



「道の駅おがわ」にある『だいち食堂パチョコ』子育てをしながら夫婦で店に立つ

るのだという。

妻の千恵子さんのことを、中村さんは「村の伝統的な食文化や生活を教えてくれた師匠」だと慕ってやまない。千恵子さんもまた「小さな子どもがいるのに、山間地の小川村の中でもさらに不便な山奥を選んで暮らしている変わり者」と言いながらも、若い世代の新しい価値観を尊重し、中村さんのことを温かく見守っている。移住者と先人が絆を深め合い、共に未来に向かって種を撒いている姿がそこにあった。

マラウイでの活動と、大豆

2007年から二年間、中村さんはエイズ対策の隊員としてマラウイで活動した。エイズ患者たちの栄養改善を図ろうと大豆に目をつけたのは良いが、積極的に取り入れてくれるかどうか自信がなかった。そこで閃いたのが、大豆でパワーを取り戻すエイズ患者の物語を上演することだった。

このアイデアに医療系の隊員仲間が賛同し、脚本は中村さんが担当、劇団

を結成することができた。劇の中で、中村さんは『Soya man(大豆男)』を演じた。「小川村で経験を積んだら、マラウイでもう一度大豆の普及活動にチャレンジしたい」と夢を語る中村さん。どうやら『Soya man』としての活動は、まだ幕を閉じていないようだ。

マラウイへの想いを胸に、村の一員として生きる

「高齢者世帯や独り暮らしが多いこの村では、すぐに食べられるお弁当やお惣菜を求める声が多かったんです。観光客向けのメニューだけでなく、村の人たちの声にも耳を傾け、地域に根ざした食堂になりたい」と、目下の課題は食堂を軌道に乗せることだと中村さんは話す。地域の暮らしと人々の心に寄り添い、新しい価値を生み出す—中村さんの移住先での営みは、マラウイでのJOCV活動に通じるものがあるといえるだろう。

食堂を通して村人の食に関わるようになったことで、家族ぐるみの付き合いも増えていったという。「村には、地域の仕事がたくさんある。消防団や公民館

中村 雄弥さん プロフィール

愛知県名古屋市出身。JICA青年海外協力隊の他、新聞記者や国際NGOでの勤務経験を持つ。2016年に地域おこし協力隊として長野県上水内郡小川村に移住。マラウイでの大豆を使った栄養改善事業の経験から、同村の特産である西山大豆に着目し『だいち食堂パチョコ』を開業した。

の役員など、やらなければならないことが多い。でも、それも村の一員として認められるための大切な過程だと思っています」その力強い言葉からは、小川村への深い愛情が伝わってくる。

「小川村は、都会に比べれば不便なところもある。でも、自然が豊かで、人々が温かい。ここで暮らすことは、自分にとって大きな喜びです」さらに中村さんは続ける。「小川村で、子どもを育てていきたい。そのためには、自分の暮らしもこの村も、より良くしなければならぬ」それは単なる田舎暮らしへの憧憬ではない。遠いアフリカの地に思いを馳せながら、小川村の地にしっかり足をつけていまを生きる。その傍には、いつも家族と村人がいて、中村さんを支えているのだ。

中村さんへのエール！

小川村在住
吉田 文恭さん
吉田 千恵子さん 夫妻



小川村に来てくれて本当に感謝

中村さんほど飾りつけのない人はいない。特産品の『西山大豆』に興味を持ってきて、地域を盛り上げていこうという姿勢はピカイチですね。毎日忙しくしているからご家族のことも気になってしまって、二人の子どもたちはどうしているのかな、っていつも夫婦で話しているんですよ。小川村に来てくれたこと、本当に感謝しています。